

体験を漢字にして示す

「熱い」という字など、「あつい」と読めただけでは、ほんとにこの字が読めたとは言えません。「暑い」とどう違うかがわからなければ、読めたことになりません。

こういう字の指導は、二本の牛乳瓶に、「熱い」「冷たい」という漢字を書いた紙を貼っておき、それぞれ、熱湯と氷水とを入れておいて、子どもに瓶に触れさせるのです。

子どもは、二つの瓶に触れることにより、熱いことの体験と、冷たいことの体験をし、その体験をそれぞれの漢字と結びつけるようになるでしょう。

こうして、「熱い」という漢字を見れば、そこに熱湯が入れてなくても、触れて熱かった時の経験が思い出され、その感触がよみがえるようになり、ここではじめて「熱い」という漢字がほんとうに読めたこととなります。

長い・短い・重い・軽い・太い・細い・広い・狭い・大きい・小さい...

...こういう漢字も、同様にして、単に発音できるようにするだけではなくて、体得させなければなりません。

マッチ箱を二つ用意して、一つには鉛などの重い物を入れて、これに「重い」と書いておき、もう一つには綿でも入れて、「軽い」と書いておく。「長い」「短い」は、使い古しの二本の割箸を利用してもよいでしょう。この場合は、漢字を書いたカードを、糸で箸に結びつけておくのです。

「太い」「細い」「大きい」「小さい」.....も同じことです。もうこれ以上説明することはないでしょう。その他、「丸い」「四角」「三角」「白」「黒」.....なども、このようにして教えます。